

# 哀歌に託す自己励起

——ヘンリー・ヴォーン小考（九）——

森田 孟

ヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-95) の『火  
花散る燧石』*Silex Scintillans* (1650, 1655) には、段落記  
号 (paragraph mark, or pilcrow) の「¶」だけで標題のな  
い作品が第一部に六篇、第二部に三篇、合せて九篇収録さ  
れている。いずれも、夭折した末弟と最初の妻への追悼・  
哀歌、もしくはそれに関連のある内容の作品群とみられる。  
今回はそれらの様態を凝視してみた。

各作品は各々第一行を標題のようにして、その前に段落  
記号を付して掲出するが、その邦訳には、便宜上作品の出  
現順に、前に「記一」、「記二」の如く番号をつけておく。

最初は、この九篇の中で最も長い作品である。

「記一」私が誰を悼むのか知る方は  
¶ Thou that know'st for whom I mourne

私が誰<sup>(1)</sup>を悼むのか この涙は

何故溢れ出るのか

知る方は 彼が戻<sup>かた</sup>ってくるまで記録なさるのだ

ここに残された彼の塵の悉くを、

御身なら た易く妨げられそうだ

今流れさせているようにこの涙を

そして彼が逝った日に付け足して下されそうだ

かなりの数の年月を。

しかし私の罪だったのだ 御身の手で無理やり

この〈サクラソウ〉を摘んでもらったのは

御身に早々選ばれることで予め警告してもらったのは

私の魂が捜し回るかも知れないと。

おお 何と虚しいものか人間とは！

〈眼〉の素早い瞬きのようだった

彼の〈小屋〉<sup>(3)</sup>は倒れてしまった、その短い寿命は

またたく間にさえ始まるのだ！

御身の諸手が私たちを造られている九か月

そして多くの年月が（ああ！）

過ぎ去らなくてはならないのだ 私たちが御身のことを

舌足らずに話したり議論も出来ないうちに。

でも私には分っている 御身の最も取るに足らない物でも<sup>(4)</sup>

羽一枚、貝殻一つ、

棒切れや、何かの〈機会〉に持ち出される〈答〉でさえ

私たちの最も素晴らしいものを凌ぐのだと、

そうだ、私には分っている このような切れ端も遂には

見事に造られたものより長持ちするし

私たちが過した〈二十〉年の歳月さえ

私たちの名前より長生きするほどだと。

こうして御身は人間の外側にお置きになったのだ

〈凡人〉の〈眼〉にとつての死を

彼の中の天国が甘んじて受け入れそうな死で

密かに永続するものを、

こうして 若さと愚行は（人間の最初の恥だが）

すっかり葬られることになり

真面目な考えが抑え始めるのだ

賢者の狂気の〈笑い〉<sup>(5)</sup>を、

鈍い 見下げ果てた 蛆虫共！ 留まろうとは

しないのだ 私たちの最初の美しい寢床には、

しかも〈天国〉からは這い出してゆくにちがいない

一足ごとに踏みしめながら、

それでも私たちの〈巡礼の旅〉は自由で

棘一つなく滑らかだった、

数々の楽しみが〈永遠〉を挫いてしまい

毒妻が〈穀物〉の息の根を止めてしまった。<sup>(6)</sup>

こうして〈十字架〉<sup>(7)</sup>によって〈救済〉が行われ

苦痛が母親となるが

その苦しい陣痛は多くの息子を生むことになる

各々他の子より増しな子を、

音もなく湧く涙は御身の玉座を貫けるのだ、<sup>(8)</sup>

声高かな〈喜び〉が翼を欲しがる時に、  
するとどれ程巧妙に演奏される弦楽器よりも

爽快な空気が 呻き声から流れ出てくる、

こうして〈主〉よ、私には分るのです 私の得るものは大  
きく

私の失うものはそれとは較べようもなく僅かだと、  
それでも私は何か更に請い願わなくてはなりません

御身だけがそれを為て下されるので。

おお 私に(彼同様)私の〈行く末〉を教えて下さい!<sup>(10)</sup>

それを見つげ出すのを同じように喜びとして下さい、

そして御身のお〈命じに〉なることが何であれ

御身の〈僕〉にはそれをよく守らせて下さい!

そうしていつも私の魂を彼と同じく純白にし

私の信仰を同じように清らかで揺るぎないものにして<sup>(11)</sup>

〈主〉よ、私を飾って下さい 御身が既に

彼の冠となさった〈王冠〉で!

[M・四一六一―一八]

### 訳注

(1) およそ二〇歳で他界した弟ウィリアムの死(一六四八年

七月)を悼んでいる。「記二」「さあ、さあ、私はここでどうすればいい?」「小考(二)60―62」、後出の「記四」「沈黙と日々の隠密性」「二七―二八行目、同じく「記六」「私は先日歩いて」六一行目、及び双子の弟トマスの次の一文、「この〈作品〉は〈急いで〉作られたもので、私の〈哀悼〉の〈日々〉に〈弟の死〉という悲しい〈出来事〉についてであった」(Thomas Vaughan, *Anthroposophia Theomistica*, 1650, p. 65)「この作品の序文の日付けは一六四八年」参照 [M・七三二]。

(2) O what a vanity is man! 「詩篇」39・5「確かに人は最上の状態にあっても全く虚しいものだ」[RA・五四七]。

(3) His Cottage = his body 「身体」[F・一六六]。

(4) Yet have I knowne ... excell. この四行、ヴォーンの散文「生と死にうつ」の一節[M・二九七・三七四〇]を参照。「彼は〈神〉の賢明な配慮と争ったのだが、それというも羽製のささやかな一着と緑の葉で再生した衣装でも、合理的な〈魂〉と〈全能の神〉の呼吸とを宿す建物とを擦り減らせるのだから」[M・七三二]。

(5) The wise-mans-madnes *Laughter*. 「伝道の手書」2・2

「私は笑いにういて言った、それは狂気だと」[M・同]。

(6) *tars had choakt the Corne*. 「プラティによる福音書」13・7、22―24 [RA・五四七]。

(7) a mother, / Whose painfull throws. ヴォーンは医学上の

語呂合せをしてゐるか。‘mother’の意味の二に ‘hysteria’

(OED mother 12) がある [同]

- (8) A silent tear. G・ハーバート「家族」“The Familie”四行詩六連計二四行の詩、W i L・四七六・七九の「七二〇行目」喜びがしばしばそこには在り、悲しみも喜び同様しばしばだ／しかし悲しみには騒音はない／それでも調子の狂った恐れよりは声高に話す。／音もなく湧く涙ほど金切り声を挙げるものは何か？、及び同じく「シオン」“Ston”六行詩四連計二四行の詩、W i L・三八一・八三三の二二行目「しかし呻きは素早く、翼で一杯になつてゐる」を参照 [M・七三三]。

- (9) And sweeter … string. G・ハーバート「シオン」の一七―一八行目「ソロモンの黄銅の海と石の世界は悉く／御身には良い呻きの一声ほども貴重ではなぬ」、及び同じく「感謝」“Gratefulness”四行詩八連計三二行の詩、W i L・四三五・三二七の第六連「呻きにはとても作り出せない程の優れた調べを／御身がまだ凌げないからではなく／御身の愛がこの田園の空気を／吸つたから」を参照 [同]。
- (10) O let me… my End 二詩篇 39・4 「おお、主よ、教え下さい、私の行く末を、私の生涯はどのようなものか、如何に私が儂いか悟るように」 [R A・五四八]。

- (11) pure, and steady. ヴォーオンの詩「祝祭」“The Feast” [M・五三四・三]の「私の心が澄んで揺ぎないものに」

‘my heart is clean & steady’, 参照 [M・七三三]。

原則として八音節と六音節の詩行が A B A B C D C D … と交互に押韻する六四行。最後の十行は八音節と七音節の組み合わせで、重い陰鬱感を醸成する。

次も弟を悼む作品だが、「記二」 さあ、さあ、私はここでどうすればいい？」は、既に、この詩集の構成の有り方を観る一端として紹介済みである [小考 (二) 60-62]。

次は、八音節と四音節の詩行が A B A B C D C D の型で押韻する八行詩四連から成る。

〔記三〕 我が生涯の喜びよ！

¶ Joy of my life !

我が生涯の喜びよ<sup>(1)</sup> 私をここに置き去りにしたのに

尚まだ 私が〈愛してやまぬ者〉！

不在でも 上から私の舵を

取るとは 何たること！

良く生きられた人生は

この真実を賞讃する、

生きていても 死んでしまっても  
それは決して終らない。

2

星々は大いに役立つ、夜は  
暗くて 長いが、

〈道路〉がぬかるんでいると 一人は正しく行けても

六人は誤ってしまいかも知れない。

ひとすじ  
一条のきらめく光線は

雲の上を走り抜ければ

道を明るく照らし出し

群像を導けそうだ。

3

〈神の聖人方〉<sup>がた</sup>は輝く光、ここに長く

留まる者は通り過ぎるにちがいない

暗い丘陵を、速い流れを、そして険しい道を

玻璃のように滑らかに、

しかしこれらは一晩中

〈蠟燭〉のように放ち注ぐ

各々の光線を そして光で  
私たちを〈寢床〉へと導く。

4

彼らは（実際）私たちの〈柱の火〉<sup>(2)</sup>で

私たちが進んでゆくにつれて見えてくる、

彼らのはあの〈都市〉の光輝く尖塔<sup>(3)</sup>で

そこへと私たちは旅立ってゆく、

剣<sup>(4)</sup>のような閃光が

罪ゆえに人を遠ざける

最初は〈外へ〉<sup>(4)</sup>と、だが〈この〉光線は

彼を導くであろう 〈内へ〉と。

[M・四二二一三]

### 訳注

(1) ヴォーンがここで想起しているのは最初の妻キャサリンか、弟のウィリアムかについて、ハッチンソンが議論している「M・七三三」。スペンサーが後に妻となった女性への愛を吐露したものとみられる『恋愛小曲集』*Amoretti* (1595)の中の第八八番ソネットをこの句で始めていると

ころから、これは亡妻を指すと考える向きもあるが、この詩の前の二篇（「記一」、**「記二」**）も後の**「記四」**も弟を悼む詩であるし、キャサリンはこの詩集の第一部と第二部の間の時期に死去したと考えられるかなり有力な理由がある——と考証している——からとして、弟だろうとみる「H・一九五—九六」

(2) Pillar-fires: 古代イスラエル王国の人々（ユダヤ人）を導いた「火の柱」。「出エジプト記」13・21「主は彼らの前を進んで昼は雲の柱で導き、夜は火の柱で彼らに光を与えられたので、彼らは昼も夜も行進できた」[F・一七五]

(3) that Cities shining spires: 「ヨハネの黙示録」21 の天国のようなエルサレムの描写を見よ「RA・五五〇」。十二の土台石をそれぞれ様々な宝石で飾った高い城壁と、各々一個の真珠で出来ている十二の門を持つ都、だと描かれている。

(4) エデンの園を護った「炎立つ剣」*a flaming sword*「創世記」3・24「F・一七五」。「こうしてアダムを追放して生命の木に到る道を守るためにエデンの園の東にケルビムと、全ての道を切り拓く炎立つ剣を置かれた」。

第三四連について。ヴォーンにとって死者というのは、自らの光を送って我らの道を照らし示してくれる星のようなものだった。詩人は信じているのだ、弟は不可視の世界に生きていて尚も自分に影響を与え続けていると「H・一

七八、一九五」。「記七」でも、死者を星に譬えている。

次は、八音節と四音節の詩行が交互に、A B A B C D C D…と押韻してゆく三二行の作品である。五〇日を千二百時間と表現して、まず読者を瞠目させる。

「記四」 沈黙と日々の隠密よ！

¶ Silence, and stealth of dayes !

沈黙にして隠密 来る日来る日は！ それが今だ

汝が逝<sup>(1)</sup>つて以来

千二百時間、そして眉<sup>(2)</sup>ではなく

〈雲〉が突き出ている。

どこか〈洞窟〉の濃密な湿気の中で

光から閉め出されている人が

唯一の灯火<sup>(3)</sup>を据えつけて

夜に敢然と立ち向かい

自らの〈太陽〉から歩き去りながら、過ぎてゆくと

あの煌めく〈光線〉が

濃霧の中を切り込んで大急ぎで

彼の盛んな日へと戻ってゆくが

そのように一分一分飛び越しながら私は後退りしてゆく

あの時間へと

汝を最後に見せてくれたものの 汝の光と

力とを打ち砕いた時間へと、

私は捜し求め 私の魂を無理強いして再び

あの光の束を見ようとするが

芯の燃え残り以外は何も私には

はつきり目にできない、

あの暗い死者が眠るのは 知られている

ありふれた墓の中でだが

〈造物主〉の御座へ飛んでいった人々は

そこで輝き 燃える、

おお 私が彼らを追跡できればいいのに！ だが魂たちは

互いに互いを追跡しなければならぬ、

それで今や 塵ではなく精霊が

汝の兄弟になるに違いない。

それでも私には〈真珠〉<sup>(6)</sup>が一つあり その光によって

あらゆる物が私には見えるし

〈大地〉の真只中<sup>(ハイト)</sup>に 夜中も

〈天国〉と汝が 見つかるのだ。

[M・四二五―二六]

### 訳注

- (1) 弟ウィリアムを指すだろう。その死は一六四八年の七月一日あたりなので「H・九五―九六」、千二百時間とは五〇日のことだから文字通りに取ればこの詩は、同年の九月一日か二日に書かれたことになる。「M・七三四」。
- (2) not a brow/... hang on. 「死・対話」【小考 (三) 21】の一―二―三行目「雲」が／年中〈太陽〉の眉に掛っていて「参照」【R・A・五五三】。「brow」には「崖鼻」の意味もある。
- (3) lamp, ペテットは「一般にこの暗喩は魂 (the soul) を表す」【P・二二四】と言う【R・A・五五三】。
- (4) snuff. 文字通りには、蠟燭の端の燃えた部分。次を参照。「養分になっている物が尽きてゆくと／細ロークは芯の燃え残りになるように」(Henry King [1592-1669]. チェスターの主教を務めた [1642-69]. 詩人で、ウォーン同様王党派を支持して迫害された。ベン・ジョンソン、アイザック・ウォールトンらの友人)「An Elegy upon ...Gustavus Adolphus」9-10) 【R・A・五五四】
- (5) O could I track them! ハビントン「タルボットへの哀歌

III] (Habington [William, 1603-54. 英国のカトリック詩人・歴史家、チャールズ一世に仕えた]、Elegie 3 to Talbot) の二三行目 (Poems, ed. Kenneth Altot, 1948, p.103) 「私にはあの、汝が天国での旅で／辿った道を追跡するわけにはいかない」を参照「M・七三四」。

(6) Pearl. おそらく地口だろう、「眼の水晶体レンズ」(OED pearl sb4a)との。ハッチンソンは、「この真珠は作者の妻か、もしくは他の人々が考えるように「バイブル」かも知れない「H・一九五」と言うが、ヴォーンがたとえ愛する人にしろ誰か他の人間の光によって自分は「あらゆる物」を見るなどと描出するとは思えない。ここに相応しい背景は、次の「マタイによる福音書」13・45-46だろう、「天国は良い真珠を捜している商人のようなもの。高価な真珠を見つけると出かけてゆき、自分の持ち物を皆売り払ってそれを買うのだ」。ヴォーンが、天国の光によって(天国(最終行の))を見つける人だと自らを描いても別に驚くことではない。「聖書に」〔小考(四)〕13・二六行目にも「真珠」は出てくる「RA・五五四」。

七歳年少の弟が二十歳そこそこで死去して以来の一年五か月近くは、声もなくひっそりと過ごす一時間一時間、いや、一分一分(と間もなく一三行目で言い換えている)の

毎日だった、という悲嘆は哀切極まりない。

同じ事情は既に見た「記二」さあ、さあ、私はここでどうすればいい?でも、「彼が去ってしまったので／どの一日も十年になり／どの一時間も、一年になった」〔小考(二)61〕でも変わらない。一年五か月を一分一分の積み重ねで捉える「記四」に対して、こちらは逆に、一日を十年、一時間を一年と、短い時間を長く感じ取るという違いはあるが、その哀傷表現の類似は見事と言うほかない。

ハッチンソンは、兄トマス「詩人ヘンリーの双子の弟」が末弟の死を「遙かに栄光に充ちた業務で」と言及していることから、この弟の死は家の中のそれではあっても内乱の戦争で受けた傷か病気の結果だとの示唆になるうが、それならヘンリーが『オリヴ山』の最後の祈りの中で、敵は「その手を我が友人たち、私の最も親しく近い縁者の血で洗ったのだ」〔M・一六七〕と述べていることも頷ける「H・九七」と言うのは確かに頷けよう。この詩人にとって、何という忌まわしい内乱であったことか。

マーティンが態々ハビントンの使用例を挙げて注意を喚起する「訳注(5)」ように、未だ天国にはいない生身の「私」は、死者をどれ程「追跡し」たくても実際には叶う



ことではないが、「魂たちは互いに互いを追跡しなければならぬ」、そうあって欲しいと願うことで、この語り手は自らを慰め、励まし元気づけるのだ。ここに二度重ねて使われる動詞「追跡する」trackはこの詩集では他にもう二度――「鶏鳴」「小考（八）32」の三五行目「魂は彼「神」の眼以外の眼によって追跡される」ことがあるだろうか、と、「記六」「本稿後出」四九行目「汝の足どりを辿る（track）」ことが出来れば――現れるだけである。強調したいことになればなる程表明はさり気なく最少限に留めなければ効果は期待できない。四回は最少限ぎりぎりだったであろう。そのうちの二回が、「記四」では続けて使われている。

愛しい死者をせめて「追跡し」、足どりを「辿り」たいという万斛の切望が、「ㄱ」印のみで標題のない作品群を作者に書かせたのである。

【記五】 確かに〈体〉の絆はある

ㄱ Sure, there's a tie of Bodys!

確かに〈体<sup>からだ</sup>〉の絆はある<sup>(1)</sup>！ そして体が

（それと共に）溶けて〈土〉になるにつれて  
愛は萎れてゆき、記憶は錆つく、

あの冷たい塵に覆われて、

というのも事物はこうして〈一か所に休らぎ〉<sup>(2)</sup>、〈光の束

や〈行動〉はなく

〈接触〉するでもないでもなく<sup>(3)</sup>

人間は素晴らしい〈金盞花〉であり、体は逃げ去ったが  
頭を閉ざして項垂れる。

2

〈生存〉中に疎遠な人々<sup>(4)</sup>は〈協力し〉て〈感じ取る〉のだ

遠く離れた事物は結合し、

葉草は眠って〈東方〉へ靡き、ある鳥はそこから

光の〈帰還〉を凝視めるのだと、

しかし心はそれほど親切ではない、偽りの短い喜びが

私たちに告げる 世界は素晴らしいのだと、

そして私たちを〈想像上の〉飛翔に包み込む<sup>(5)</sup>

忠実な墓から遠く離れて、

こうしてラザロは町から運び出された、<sup>(6)</sup>

というのも私たちの敵の主な業<sup>わざ</sup>なのだから

距離を隔てて勝れたものを悉くまず水浸しにし

それからその中心を包囲するのが。

しかし私は私自らの〔<sup>7</sup>髑髏〕になろう、尤も

私は生きている とお世辞屋は言うが、

〈不確かなこと〉は分らないのだから

確かめよう、信ずるのではなく。

〔M・四二九〕

### 訳注

(1) Feltham, *Resolves*, i: 82 (5th ed. 1634, p.253) 「忍耐力が愛を引き起す」の中の一節、「友人を結びつけるのにこれ以上確かなものはない：確かに、〈魂の共感〉というものはある」を参照〔M・七三四〕。

(2) *Center'd*. 「一か所に留められた」「休息させられた」〔M・同〕。「休息して」「安らいで」〔F・一八三〕。「埋められた死体同様に」安らぐ。〔墮落〕「小考(二)55」の三五三六行目「人間は沈んでしまうのだ／〈中心〉の下に、自らの経帷子の下に」参照〔RA・五五五〕。

(3) *without..Contaction*. 放射や動きがなくて如何なる接触もしないし感じないのである。尚、「恩恵」〔小考(七)27-28〕の七八行目と訳注(2)も参照〔M・七三四〕。

(4) *Absents within the line*. "Line" = "The line of life. この句の意味は、「生きている間互いに無沙汰である人々」〔F・一八三〕。

'within the line' は「人生の範囲内」の意だろう。死んではいないが互いに疎遠な人々が相互に共感し合うのだ。以下を参照。「星座」〔小考(七)22〕の二二行目「限りなき境界線を探し回る」／「昇天讃歌」『*Ascension-Hymn*』〔M・四八三・二〇〕「エデンの境界線内で」／「森」〔小考(二)47〕の九行目「悲しく重々しい死(線)の下で」〔M・七三四〕。

'Absents' 「互いに別れ別れになっている人々」〔RA・五五五〕。

(5) *And wrap..grave*. 「死についての宗教の観念から遠く離れた偽りの想像をさせることに我々を巻き込む」〔M・七三四〕。

(6) *Lazarus..town*. 「彼をもっと容易に忘れられるように」と〔M・同〕。

ラザロの墓はベタニア「エルサレム東方のオリヴ山麓にある旧村」の郊外の洞窟だと述べられている「ヨハネによる福音書」11・38からの推測〔F・一八三〕。

(7) *Deaths-head*. 「髑髏」は死すべき運命の象徴。ヴォーンは絶えず自らの死の免れ難さを冥想しており、自らを既に死んだものと見做している〔RA・五五六〕。

この「鬮籠」はこの詩集ではもう一回だけ、「喜び」「小考（八）19」の六行目に出てくる。

十音節と六音節の詩行が交互に並ぶ二四行の作品。最初の八行は二行連句、「2」の部分はA B A B C D C D…と押韻する。

次の「記六」は、第一部の最後から二番目の作品で、十音節と四音節詩行が交互に三度続いた後を六音節行で締め括る七行詩九連計六三行である。A B B A A C C Cの型で押韻する誠に整った詩型である。

「記六」 私は先日歩いて

¶ I walkt the other day

私は先日歩いて（いつもの時間を費すために）<sup>(1)</sup>

ある畑に入っていた

これまで時折り 粹な花を育てている<sup>(2)</sup>

土壌を見たので、

しかし今は〈冬〉で乱れたままだった 四阿も悉く

そして珍しい蓄えも、

私がそこにあるとこれまで知っていたものだ。

2

それでも私は物事に直面して探索するのに

覗き見も凝視も好まなかったので

自分自身で考えたのだった 地上のこのそばには

他の泉があるかも知れず

それなら 冷淡な友人連中同様 私たちに年に一度ぐらい

会ってほしいそうだから 花なら

何か他の四阿がありそうだと。

3

それで最も手近に見つけ出せたものを取り上げて

私は掘ったのだ

彼が育ってくるのを見たことがあった辺りを、

すると だんだん

見えてきた 温かな〈隠修士〉<sup>(3)</sup>が一人横たわっているのを<sup>(4)</sup>

そこで緑も瑞々しく

彼は私たちに見られることなく生きていたのだった。

4

沢山〈込み入った〉珍らしい問い掛けを

私はそこに撒き散らした、

しかし私が無理強いできそうなことは 唯 彼が今

そこで償うことだけだった

このように彼に降り掛ったような損失を、

そしてずっと長らく

この上なく美しく若々しくあつてくれることだった。

5

こうして過ぎながら 私は〈衣服〉を彼の頭上に投げかけ<sup>(5)</sup>

ずきずき心を傷めた

彼の寢床に涙をしとどに落とした私自身の

脆さを恐れて、

それから溜息をつきながら囁いた、 幸せだ死者は！<sup>(6)</sup>

どのような平穩が今

下では彼を揺すって眠らせているのだろうか と。

6

それなのに何と少ないことか そのような教義は貧しい

根から生ずるのだと信ずる人が、

その根は〈冬〉の間中 この足許に眠っていて

その教義を物事の真理へ 光へと

持ち上げる翼を全く持たずに

依然として踏みつけられているのだ

あらゆる彷徨える土の塊によって。

7

おお汝！ その精神は最初は死者を<sup>(7)</sup>

燃え上がらせて温めたし

神聖な〈保育〉によって生命を

養われたこの体格には

かつては存在も、形態も、名称も<sup>(8)</sup>なかったが

もし私がこの下方で

汝の足どりを辿ることが出来れば、<sup>(9)</sup>

8

この〈仮面〉と影<sup>(10)</sup>の中に私が見ることの出来るのは

汝の神聖なやり方であり

そのような隠された坂道<sup>(11)</sup>を登って あの

汝から突然分れ出る日に到れるのだ

何しろ汝はあらゆる物の中に 目には見えないが存在して

いて私に示すのだから 汝の平穩ぶりを

汝の慈悲を愛を、そして安らぎを、

9

だからこの、夢と悲しみが支配する〈気がかり〉から

私を上方へと導いて下さい

そこでは〈光〉〈喜び〉〈余暇<sup>(12)</sup>〉そして真物の〈慰安〉が

何ら苦痛を伴わずに動いており

そこでは 汝の中に隠れて私に彼の生命を再び示す<sup>(13)</sup>が

その物言わぬ墓<sup>(14)</sup>で

こうして一年中 私は悲しみ悼むのだ。

〔M・四七八―七九〕

### 訳注

(1) to spend my hour. おそらく瞑想するためのいつもの時間  
間〔RA・五八六〕。

(2) A gallant flower. 最初からの四行、G・ハーバートの  
「平和」"Peace"〔六行詩七連計四二行の詩、W i L・四三

七―四一〕の二三―一五行目「それから私はある庭へ入って  
ゆき、見つけたのだった／粹な花／〈皇帝の冠〉を」を参  
照〔M・七四五〕。

(3) Recluse. 一生 洞窟、あばら屋などに自ら進んで、ある  
いは小房、個室に終生閉じ込める修道者。

(4) ここからの三行、次を参照。「種子密かに成長して」"The  
Seed growing secretly"〔本稿後出〕〔M・五一―二五―二  
六〕「親愛なる密かな〈緑の姿〉よ！ 下方で／育まれた  
嵐と風と冬の夜な夜なは」。

G・ハーバートの「花」"The Flower"〔七行詩七連計四  
九行の詩、W i L・五六六―七〇〕の第二連「私の渾んだ  
心が緑の姿を／取り戻せたと誰が考えただろうか？ とつく  
の昔に／すっかり地下に消え失せていた花々が／開くと母  
である根を見に去ってゆくように。／それらが一緒になる  
所は／厳しい天候が世間には死なのであり、家を知られな  
いままにしておくのだ」〔M・七四五〕

(5) I threw the Clothes... of his head. 即ち、植物に土を  
かけ直した〔RA・五八七〕。

(6) 「ヨハネの黙示録」14・13「主を信じて死ぬ者は幸いで  
ある…労苦から解放されて安らげる」〔RA・同〕

(7) ここからの四行、弟トマススの *Magia Adamica* 「読者へ」  
の次の文参照。「ヘルメスの主張するところでは、最初、  
大地は震える泥沼が震動するジュエリー状のもので、保育と

〔神霊〕の熱によって凝固する水以外の何物でもなかった」〔RA・同〕。

(8) この一節は「被造物」についての神の創造の火と、世界の「孵化」についての錬金術の面での、誤った叙述だ」〔P・七九〕という評釈がある〔F・二四八〕。

(9) Thy steps track here below, 被造物を観察し、瞑想すること」〔RA・五八七〕。

(10) Masques and shadows, ヴォーンの『孤独な花』(一六五四)の献辞〔M・二一四・一七二〇・三七一四〕の中の叙述を参照。「時代のこの粗野な〈仮面〉の中に我らが見る形と身振りの幾らかは全て、〈精神〉が最初に帯びていたものをそれらが各々の役割を果たした時に再び投げ出した非常に多くの変装にすぎない」「この世の華やかな見かけは全て、私には、確かな形を留めず、長くは続かない一連の湧き上がる素早い〈雲〉にすぎないようにみえる」〔M・七四五〕。

覆面の概念―覆い隠す、と仮面劇、舞台表現―に纏わる意味深い地口がありそうだ。ヴォーンは舞台に当てはまる語彙をよく使う、「再生」〔小考(三) 18〕の「単なる舞台で見世物だ」となど。シェイクスピアの「この種の中の最良のものは影にすぎない」〔夏の夜の夢〕V・i・二二五)と比較せよ。この観念は、自然の世界は神を顕すと共に隠すというものだ。神は「最も隠れている」と同時に

「最も顕れている」という錬金術の書物の主題を要約するもの」〔RA・五八七〕。

(11) those hid ascents, 被造物の段階、存在の尺度、度合」〔同〕。

(12) Light, Joy, Leisure, G・ハーバートの「天国」"Heaven" 〔問い掛けと一語 "Echo" との二〇対から成る作品、Wi L・六五五―五八〕の一九行目「光、喜び、余暇だが、それらは持続するか? 永遠に」がある〔M・七四五〕。

(13) hid in thee, shew me his life again. 「コロサイ人への手紙」3・3 「あなた方は死んだのであり、あなた方の命はキリストと共に神の内に隠されている」〔RA・五八七〕。

(14) Thus all the year I mourn, 「この一連の哀歌は、ウィリアムの死後の一年間ずっと続いているようにみえる」〔H・一〇四〕〔RA・同〕。

死者は植物になって地下に居り、そこから地上へ現れてくる。いや、来て欲しいものだと、この語り手「私」は日頃希っている。それで、夭折した弟が〈隠修士〉として畑で生きていることを幻視できたのである。そしてそれ故の新たな〈気掛り〉から彼は解放されたいと切望するが、この作品になると死者もかなり一般化の様相をみせ、その悲しみは相当昇華されている趣が窺えよう。

以上の六篇が、第一部の無標題「Ⅱ」印作品である。以下は第二部に収録される。

〔記七〕 彼らは皆 光の世界に行ってしまった！

Ⅱ They are all gone into the world of light !

彼らは皆 光の世界に行ってしまった！<sup>(1)</sup>

それで私だけ ここでぐずぐずしている、

彼らの思い出そのものが美しく明るくて

私の悲しい物想いは それだけ澄み切っている。

それは私の曇った胸の中で 燃え上りきらめき輝く

どこかの陰鬱な小森を照らす星々のように

あるいはあの、〈太陽〉が移転した後に<sup>(2)</sup>

この丘が纏っている幽かな光線のように。

私は彼らが歩いてゆくのをみる 栄光の〈大気〉の中を<sup>(3)</sup>

その光は私の日々を踏みつけるのだ、

私の日々は せいぜいでも単調で冴えず

唯、ちらちら光って消えてゆくばかり<sup>(5)</sup>。

おお 神聖な希望！ 気高い謙遜、

上の〈天国のもの〉のように高貴な！

こういうのがあなたの歩き方で、あなたはそれを私に示してくれた

私の冷たい愛を燃え立たせようとして、

貴くも見事な死！ 〈正義〉の〈宝石〉が

光り輝く所はどこにもなく、唯 闇の中だけ、

どのような不可思議が横たわるのか 汝の塵の彼方に

人間はその印に見かけて勝れるだろう！<sup>(4)</sup>

羽の生え揃った鳥の巣を見つけた人には分るだろう<sup>(6)</sup>

一目で その鳥が飛び立てるかどうか、

しかし 鳥が今歌っているのはどの澄んだ〈井戸〉なのか<sup>(7)</sup>

〈小森〉なのかは 彼には分からないままだろう<sup>(8)</sup>。

それでも人間が眠っている時 もっと明るい夢の中で<sup>(8)</sup>

〈御使い方〉が魂に呼び掛けるように

ある不慣れな物想いは 私たちのいつもの主題を超越して

栄光を覗き見るのだ。

もし 星が（墓<sup>9</sup>）の中に閉じ込められたら

その捕らえられた炎はどうしてもそこで燃える、  
しかし 星を閉じ込めた手が余地を作れば

星はその範囲一帯で光り輝くことだろう。

おお 永遠の生命の（父）よ、御身の

下に輝く創り出された栄光よ！

御身の精神をこの奴隷の世界から<sup>10</sup>

真物の自由へと取り戻して下さい。

この靄を追い散らして下さい、何しろ通りすがりに<sup>11</sup>

私の拡大鏡に（やはり）染みをつけ 塞ぐのだから

もしくは私を移して下さい、あの丘へ、

そこなら私に眼鏡は要らないでしょう。

[ M・四八三―八四 ]

訳注

(1) 下の詩には「払曉世圖」"The Morning-watch" [ M・四 ]

四二―五」と「夜」[小考(七) 35―37]とに著しく共通した特色、作品の典型的な本質がある。それは、観念と表現の点で多くの類似がみられる一連の哀歌の精髓であって、それこそ、天国の啓示と、霧で朧になった限りあるこの世の生命の終りへの、ヴォーンの強烈で絶え間ない憧憬である。ヴォーンが我々に残す最も確かな印象は、彼が光に憑かれた想像力の持ち主だということだ [ P・一五六―五七 ] [ RA・五九 ]。

ヴォーンの殆ど全ての詩は何らかの点でしばしば直喩とかその他の心象で光に言及する。詩集の標題 *Scintillans* がよくそれを正当化している。この詩の全体が光を放射している [ A・一〇九 ]。

ヴォーンは死者を星に準えている [ H・一七八 ]。

(2) 下の二行 (Or those faint beams in which this hill is drest, / After the Sun's remove.) に「ごうて」「個人の観察した特殊な自然風景の細部に反応するようにと読者がここで求められているような――まるでこの丘の残照は他のどの丘のそれとも異なっており、読者は、この語り手だけが見たことだけの自然の特色を想像しそれに反応しなければならぬ」とでも言うかのような一節に、私はこれまで英詩では出逢ったことがなく [ J. H. Summers, *The Hens of Donne and Jonson* [1970], p. 128) を紹介 [ RA・五九 ]。

(3) 下の行と次行 (I see them walking in an Air of glory, /



Whose light doth trample on my days.) について、「もし英語がヴォーンの母語なら、これ程論理的に不正確な動詞 (trample) を思い付けられないのではないかと思うが、それにも拘わらずこの文脈では完璧に正しく使われている」(M. Mahood, *Poetry and Humanism* [1950], p.254) を紹介してラドラムは、それは、ヴォーンが「ウェールズ人であること」が答えだと述べ、G・ハーバートの「ヨルダン・二」『Jordan』(II)「六行詩三連計一八行の詩、WIL・三六五―七二」の一―二行目「豊かすぎて太陽に被せられないようなものは無さそうだ／彼の頭を踏みつけるあの喜びなら尚更のこと」を別例に挙げる「RA・同」。

尚、'glory', 'light' は、天国の 'radiance' (燦然たる光輝) を指す「同」。

(4) My days, .. ヴォーンの散文『オリヴ山』の「闇の中の人・即ち死論」の一節「M・一七〇・四一五」(見込みのない無意味な状態になると人々は各々貴重な魂を放棄して)「自らの最も明るい日々を、闇と陰鬱の日々に、雲と濃霧の日々にする」を参照「M・七四五」。

(5) glimmering and decays, 「眼に見えるものは全て単なる幻想であり、中身の無い輪郭であるが、眼に見えないものは実体であり…」(Hermetica, Ibelus vi. 4b [ed. W. Scott, p.169] を参照「M・同」)。

(6) He ... found some fledg'd birds nest... 鳥は魂を表す

普通の象徴。次と比較のこと、「混乱と脆さ」「小考(五) 10」の四六―四八「私の火には翼を与えて／私の魂を孵したまえ、それが御身の居ます所まで／飛んでいって」と「聖書」『H. Scriptures』「M・四四一」の四行目「魂が孵されて(永遠)に到る所」【RA・五九二】。

この一連、死者の思い出を、鳥が見えなく聞こえなくなつた後にも心の中に残っている鳥の歌に、譬えている【H・一七九】。

(7) Well, 井戸か泉の近隣。「宗教」【小考(二) 58】の訳注

(4)、「探索」【小考(三) 29】の七〇行目「神聖な(井戸)」、及び「種子密かに成長して」【本稿後出】「M・五一・二二―二二」の「汝の永遠に潑瀾たる井戸を求めて／汚れても萎れてもいない…」を参照「M・七四五」。

「ヴォーンが羽の生え揃った鳥の運命を幻想する時には、旧約聖書の風景の中で彼のお気に入りの細部二つ——小森と井戸——が想起され、それは何篇かの彼の詩と一緒に現れる」【P・一五八―五九】【RA・五九二】。

因に「井戸」は、バイブルの新約・旧約に単・複両型で合計六四回出てくる。

(8) And yet, as Angels ... when man doth sleep, 「神聖な夢の存在はアリストテレスには理不尽なまでに疑われている。悪夢の存在は殆ど疑いようがない。天使に関わる夢があつてもおかしくないだろう。もし守護霊なるものがあるなら、

それは睡眠中の我らの周りで活躍していて時々我らの夢に命令を下すので、我らを驚かす多くの不思議な暗示、示唆、発見はそれに基づいて生ずるのだ」(Sir Thomas Browne, *Works*, [ed.] Keynes, vol. III, p.230) [RA・五九二]。

- (9) Tomb, 身体を表すのにヴォーンの使用暗喩二つ、衣服と墓は、*hermetica* の同じ一節に、次のように一緒に現れる、「汝の着る衣服…生きながらの死、感じ取ることの出来る死体、墓は、我らに付き纏う」(John Eyard, *The Divine Pymander of Hermes Trismegistus* [1650] viii, 7) [RA・同]。

- (10) Resume thy spirit…「ローマ人への手紙」8・21「被造物自身も崩壊への隷属から解放されて神の子らへの栄光に輝く自由に到れるからです」[M・七四五]。

- (11) Either disperse … Or else … no glass. 「」の詩の確固たる最後の箇所ほど真摯な、もしくは死の願望を扱っていると思える詩作での祈りを、私はあまり知らない。語り手が祈願(殆ど要求)しているのは真の自由であり、力強い展望の持続であって、その方法や値打はもはや殆ど問題ではない(前掲(2)の同書同箇所。次のも参照。「瞑想は魂の展望鏡 (perspective glass) で、それによって神を識別する、まるで遠く離れている身近な手でもあるかのよう」(Fellham, *Resolves* I xiv) [RA・五九二]。

- (12) perspective. 拡大鏡、望遠鏡 [F・二七一]。それで当り

ていようが、ヴォーンは感受性が高まった瞬間には強力な視界想像力が働いたようだ(「永遠を見た」とか「彼らが栄光の(大気)の中を歩いてゆくのが見える」など)。空気を神の鏡——精霊や自然の外観は、動きと同様に光を通して見えて我々に素晴らしい作用を及ぼす——に譬えているアグリッパが示唆するような意味での視界を想像できるのだ [RA・同]。

- (13) Or else… G・ハーバート「恩寵」“Grace” [四行詩六連計二四行の詩, *WIL*・二一六一〇] の二二二四行目「もしももしも御身が私へと動いて来られないなら/私を移して下さい、言う必要のない所へ/上から落して下さいなど」と比較のこと [M・七四五]。

」の、「ヴォーンの最も有名な詩の一篇」[A・一〇八]は、第七連までが「天国の友人たち」“Friends in Paradise”の標題で、一三八番として、ポールグレレイヴの著名な詞華集『黄金の宝庫』(Francis T. Palgrave, *The Golden Treasury of Songs and Lyrics*, 1861) 第二巻に収録されている。因にヴォーン作品では「後退」[小考(一) 17 18]が九八番として全篇、「世界」[小考(二) 62 63]が最初の七行だけ「幻視」“A Vision”と題されて同巻に採録されてい

る。

第二部になって三番目に現れるこの「記七」は、語り手の幻視の、瞑想の、対象が複数になり、追悼は末弟の他に亡妻に、そして他の死者にも及び始める。それにしても、描出される自然風景がその個々の特色を強烈に發揮して正に一回性を印象づける、というサマーズの見解「訳注(2)」とマフードの指摘「訳注(3)」ほど、というのも、前者は、ヴォーンの場合細部の具体性に富む(ロマン派や自然主義の詩人)というよりむしろ抽象度の高い表現に依る個性の強烈な印象深さへの言及であり、後者は、論理上は甚だ不正確な語を使いながら完璧に適切な文脈を生み出すというものだから、この両者ほどヴォーンの形而上派詩人の面目を言い当てている言表もないだろう。

彼の殆ど全ての詩に、大なり小なり当て嵌まる現象と言えよう。

この作品から二六番目、二七番目に次の二篇が現れるが、第二部を前・後半にもし分けるとすれば後半は丁度この二篇から始まる位置になる。

「記八」 時がある日 私の傍らを過ぎて行った

II As time one day by me did pass

時がある日 私の傍らを過ぎて行った

彼の持つ大型の薄暗い虫眼鏡

越しに、その時私は偶然 過去の日々を

記した彼の興味深い本を目にして

調べてみたが、そこでは悲しんで〈天国〉が放っていた  
追悼の光を 死者たちに。

多くの乱脈な生活を私は見たし

私の寛大な眼を静かに解かず

汚れた記録も見たが 綺麗な

白いページには 薄い 均等な

滑らかな、〈太陽〉光線のような線で

汝の名前とその全ての日々が 書かれていた。

おお 明るい幸せな(暦)<sup>1</sup>よ!

そこでは若者が星のように輝き

悉くが涙の真珠となっていて

教えてくれそうだ 適齢を へ聖なる道<sup>(2)</sup>を

そこでは突然の激痛と深刻な苦悶を経て  
信仰が一気に生命を得て、死は死んでいる。

昼を損なうどこか柔和な夜景画が

蠟燭の光に覆いを外すように

汝の明るい燭台からの

一条の光の線に照らされて輝いていた、

あの同じページに汝の慎ましい墓が

緑の香草と喜ばしく素晴らしい希望とに装われて。

ここに眠っていたのだ 私の思想の貴重な印が！それを

塵が貪っているようだった 鏽のように、

しかし塵は（私は確かに気付いたが）

隠すことで保つのだ、

我らが長く確実に補給してきたように

砂糖まぶしの菓子を 我らの選り抜きの果実を。

おお 穏やかな神聖な寢床よ そこには

死の暗い神秘の中に

美しさが在って 雲なき月の光より

遙かに明るく輝いている、

その乾いた塵のために 緑の枝々が芽吹き  
裾長い衣服が（子羊）の血に晒されている。

眠れ 幸せな亡骸よ！（祝福された眠りを！）

不幸せで私はやはり泣いているが

泣いて私は生き凌いできたので

私の生命は 相変わらず和むことなく

そのまま生き続けなければ（魂のない影！）ならない、  
生命は死んで 私の喜びは去ってしまったけれど。

[M・五二二―二三]

#### 訳注

(1) Kalendar. 主としてこの詩で追悼されている人が過した  
日々の一覧表。ヴォーンは「聖人の表」を「聖なる行為の  
表」にまで意味を拡大するつもりかも知れない。関連のあ  
る意味は、シェイクスピアの「あの方は 上流紳士そのも  
のか 模範」(“He is the card or calendar of gentry”,  
Hamlet, v. ii, 114) の「手本 模範」(OED Calendar sb3)  
[RA・六一一]。

(2) The Holy way. 引用みたい斜字体。おそらくヴォーン

は、聖餐式からの「人々への招待」を想起しているのだろう。「真底真摯に自らの罪を悔い、新しい生活を始めよう」として神の戒律に従い、今後自らの聖なる〈道〉を歩いてゆく人よ、近くに寄りなさい」「RA・同」

(3) *quails—spoils, impairs. OED* がこの箇処を引用している「RA・同」。

(4) *night-piece*. 夜の場面を表す水・油彩画、もしくは絵。[「RA・六二二」]。この第三連の意味は、この夜景画がその美を蠟燭の光によって顕にするように、墓の喜ばしい素晴らしい希望が「光の線」—おそらく追悼されている人物の善行—によって明示される（輝く）のだ、ということだ。「RA・六二二」。

(5) *For whose dry dust…Lamb's blood. [Eハネの黙示録]*  
7・9「見よ、…大群衆が白い衣服を纏い、手に手に棗椰子の枝を持って玉座の前と子羊の前に立って…」[「RA・同」]

「時」が擬人化されているなどと改めて言うまでもないが、追悼されるのも誰か特定の人物という印象は薄いだろう。二行ずつ押韻する六行七連から成り、八音節行と六音節行が同数で合計四二行の詩。この後に、二行連句五二行、そのうち八行が九音節、四四行が八音節の次の作品が続く。

「記九」 明るく若々しい光よ！

『 Fair and yong light !

明るく若々しい光よ！<sup>(1)</sup> 神聖な悲嘆と

魂を癒す憂鬱へ私を案内する人、

その人をここに生きていながら私は尚 避けたのだ、

不機嫌そうに夜鳴き鳥が<sup>(2)</sup>〈太陽〉を避けるように、

そして私自身の愚かな火に導かれながら

彷徨ったのだ 闇を 洞窟を 泥沼を。

どれ程今 私は愛していることか 私が

当時 唯の拘束だ 束縛だと 名付けていたものを悉く、

そして汝のもので 私は依然としてあり続けて<sup>(3)</sup>

生き残ったキジバト<sup>(4)</sup>のように悲しみ嘆くのだ！

おお 人々の苦しく呪われた喜びよ！<sup>(5)</sup>

最初は私たちの魂の、それからは私たちの

身体<sup>(6)</sup>の、病、毒なのだ 食べるようにと

死に到る美味<sup>(6)</sup>をひけらかして懇願するとは、

何と業<sup>わざ</sup>を振るってお前は滅ぼすことか、

微笑み嬉しそうにみせかけて殺すことか？

もし悪徳の油断ならない姿が悉く  
経験に乏しい眼の前で顕になり

悪徳が始める行動はどれもこれも

その悲しい結果を書きつけてしまおうにしろ

それでも人々は認めはしないだろう 自分たちの不運が  
あの偽りの見かけの中に留まっているのだとは 手遅れに  
なるまでは。

おお 神聖にして幸せな 健やかな 天国よ、

そこでは全てが清らか、そこでは全て等しく、

率直、無害、信頼できて公正で、明るい、

何を〈大地〉は吹き出して汝の光を押しやるのか！

どれ程祝福されてきたことか人々は！ 例え〈祖先〉<sup>(7)</sup>が

今も生き長らえて汝の貞節な火と同盟して

子孫が長く続いていても生命を作らず

貪欲な〈基本諸元素〉の奴隷であつても。

私がかつて たびたび悲嘆の表情を浮かべては

汚れた或る古い書物の中に読んだものだ、

忌まわしい悲しみの種子は 世に在るもの

の中で見るのに最も素晴らしいものと。

だからあの、全てを死なせる名高い果実は

その女の目には おいしそうに思われたのだ。<sup>(8)</sup>  
もしこのような〈天国〉の陰で

打倒する人々<sup>(9)</sup>が人間を衰えさせるのだとしたら

どれ程この世で彼らは防ぐことか

この世を 同類の殺人者を！

それでは何故 私たちは家へ送られるのを

嘆き悲しむのか 最初の公正な罰によるのに、

別に災難が増えるわけでもなく

更に弱い敵からいつまでも傷つけられたりしないのに。

それで直ぐに自由を勝ち得るのだから、

死んだ者は罪から解放されているのだから。<sup>(10)</sup>

おお 私に翼があつて自由で

今 正に 汝の覆いをすっかり免れていられればいいのに

それだと解放された魂が 不朽の香草の山々<sup>(11)</sup>の上の

潑漑たる泉の傍らに住むのだから！

ああ！我が〈神〉様！御身の羊を家へ連れ帰って下さい、

この世は嘆き悲しむ人々を唯 笑うばかりなのです。

訳注

- (1) おそらくヴォーンの最初の妻キャサリンを指す。その死の日は不明だが、この詩集の第二部を書いていた間かも知れない【H・一〇七八、一九六九七】。
- (2) night-ravens. コイサギ、ヨタカなど、夜鳴く鳥 (night-heron, nightjar, night-owl etc.) 【RA・六二二】。
- (3) And to thy name, which still I keep. おそぶく「厳かに追悼にふける」hold in solemn remembrance【同】。
- (4) turtle=turtle-dove. キジバトは番<sup>ばん</sup>同士の愛情で有名だから、この詩は弟をではなく妻の死を悼んだのは確かだと思われる【H・一〇八二】。最初からここまでの十行は、ヴォーンが長いこと彼の「若々しい光」且つ「案内人」であった妻の優しい圧迫に抵抗していたものの、彼女を失ってみて今更のように自分がこれ程自己中心でなく、妻の影響力にもっと心を開いていたら心の平安に到っていたらうに、という後悔の思いの表明であろう【H・一〇八】。
- (5) bitter cur'd delights. 撞着語で、ヴォーンの愛好する表現法。
- (6) fatal sweetness. 同じく撞着語。同時に異なった両方向が見えてしまう作者の資質と生き方を垣間みせられる。
- (7) Site. アタムのこと【F・三二二】。
- (8) fair unto the womans eye. 「創世記」3・6「その実はイヴには如何にもおいしそうにみえた」【RA・六二二】。

- (9) supplanters. おそらく「人もしくは物の墮落や破壊を引き起こす人、打倒者」(OED supplanter 2) という今は廃れた意味だろう【RA・六二二】。
- (10) 「ローマ人への手紙」6・7の引用【M・七五〇】。  
「森」【小考(二) 47 49】の締め括りにもこの一行が付け加わっている。
- (11) On everlasting, spicy mountains! 「雅歌」8・14「恋しい人よ急いで下さい、カモシカや子鹿のように香草の山々へ」【M・七五〇】

段落記号のみで無標題の最後の作品は、四人の子女を生んで若くして亡くなった妻キャサリンを、「明るく若々しい光よ」と偲ぶ追悼歌である。彼女は「神聖な悲嘆」Holy griefと「魂を癒す憂鬱」'soul-curing melancholy'(共に意味深い撞着語!)へ「私」を「案内する人」であった。

撞着語は、「苦しく呪われた喜び」【訳注(5)】「死に到る美味」【訳注(6)】と更に重ねられるし、「拘束」「束縛」などの表現もあり、字句を表面通り受け取ってゆけば素直に? そうなるかと思われるハッチンソンの穿った? 解釈【訳注(4)】も、必ずしもそのまま当たるかどうかは判らない。亡妻に対して後悔しなければならぬ実情が存在し

たというより、むしろそう思うことで追悼の度を強め、自分自身を元気づけ励まそうとしている趣が窺えるのではあるまいか。

ヴォーンはその後、亡妻の実妹エリザベスと再婚し、改めて再び四人の子女に恵まれることになる。

\*

『火花散る燧石』には、標題があるのに段落記号が付けられている作品が、実は第一部に「記二」と「記三」に挟まれて二篇——従ってこの箇所には段落記号付きの詩が四篇続くことになる——収録されている。その一篇は既に紹介済みの「¶ 真夜中」「小考（七）34-35」で、深夜に「私」が、「神の多くの情報源である星々」の「活発な（光線）の」一条一条を吟味し、神にその光となつて地上に「来て下さい」と希う作品であった。それに直ぐ続くのが、もう一篇の段落記号付きの次の詩である。

## ¶ 満足 ¶ Content

平穩、平穩！それが素晴らしい事だったとは承知している

しかしこの体の被毛は

私が隠れ込んでいるものの、そのような

衣装の擒にはならない。

私が去り逝く時には

持ち衣装を残したりしないだろう

友人にも息子にも

唯 彼ら自らの家庭が織り込むものは別にして、

2

それが、自慢にもならず十分でもないが、

彼らを泣かせるかも知れず

嘆かせるかも知れない 羊毛が

羊より長持ちするのを見ては、

貧しい（信心深い）衣装よ！

汝が裕福だったり立派だったりしたなら

おそらくあの涙が

嘆き悼んでいたのは汝の喪失で、私ではなかったらう。

3

では何故 このような巻き上った膨らんだ先端なのか、

レースに似た造りなのか？



死はあらゆるものの〈関節〉を外して

それらの栄光を蔑むもの、

〈薔薇〉<sup>4</sup>を〈好む〉にも或る者は

掌の中のが、或る者は皮膚に触れるのが 良いとする、

しかし私はそれらとは違って

私自身を持つていたい 内部に。

[M・四二二]

### 訳注

(1) pecece. = piece [of apparel] 一行目の「平穩」'peace' と地口になつてゐる「F・一七三」。

(2) points. ダブレット(身体に密着した上着)に半ズボン をくつつけたり、胴着にレースを付けたりに使われ た様々な素材の紐・房付きレース。当時の華美な衣装に使 用された「F・同」。

現代のボタンのようなもの「RA・五五〇」。

(3) a laced story. story = fabrication or falsehood 「F・同」 はななく OED story sb'se の意味。「話の主題」(story) は「褒めてゐる、面白い噂話」[RA・五五〇]。

(4) Rose. 古来多くの象徴とされてきたものだが、ここでは 「美」、それも文脈から精神上の、しかも血の通つた美を指

すか。尚、「dev・三九二」は、「知的な美、完璧、太陽」の三番目の象徴の例としてヴォーンの「探索」の一三行目「私は〈薔薇〉の／芽を明るい〈東〉に認めて露にする／〈巡礼者なる太陽〉を」[小考(三) 27]を挙げてゐる。

行頭の出入りの形で直ぐ識別できる六音節行と四音節行が、ABABCD CDの型で押韻する八行詩三連から成るこの詩に、フリーデンライヒは、牧歌の視界を示唆する「半田園詩人」の技巧が使用されていると観る。語り手は自らを、死後には「膨らんだ先端」——世俗性の印——は何も残さない羊飼いだと思ひ描くのだと。以下、彼の見解を少し追つてみよう。

この詩の語り手は、華美な装いを棄てて粗末な外衣——満足な生活を表す暗喩——を採り、野心や世俗への関心から自由になろうとする。それが「狂想曲」"A Rhapsodie" [最初の詩集(一六四六年刊)に収録されている七八行の作品、M・一〇一一]の中で羊飼いに思ひを馳せるヴォーンにとつての理想の生活なのである。彼は「貧しい〈信心深い〉衣装」を選び取るが、それは彼が内部の美を好み、「あら

ゆるものの〈関節〉を外す」死の手の届かない栄光を望む証拠である。「満足」はヴォーンのパウリヌスの生活「一六五四年に印刷された『フーラの学識に富む大司教パウリヌス(三三三三?四三二)の生活に示される原初の神性』」を想起させる。そこでは外側の態度や行状は内面のそれらを示唆していた。だから「原初の神性」は本質上内面のものであるので、内面は、最も良い所——無論、田舎——で良しとされる外面の活動や態度に反映されるのだ〔FK・一五一—五二〕。

「真夜中」では、天国が光となつて流れ出して燃え上つて眼にみえるのだと、「私」は考えている〔小考(七) 35〕。追悼・哀歌は、死者たちの居る天国を見ることが、慎しい〈満足〉を得たいという希いの表れ、ということになるのか。それが、「真夜中」と「満足」にも段落記号が付いている理由とみたい。

本稿は、〈段落記号作品〉を垣間みた。最後にもう一篇、「記六」訳注(4)と「記七」訳注(7)で喚起された詩——次号で取り上げる筈の作品群への橋渡しにもなりそうな次の作品——を、みておきたい。

種子<sup>たね</sup>密かに成長して The Seed growing secretly

〔マルコによる福音書〕第四章第二十六節<sup>(1)</sup>

もし この世の友人たちだったら 貧しい人が  
栄光だ、黄金だ、〈王冠〉だ、〈玉座〉だとしばしば  
感じるかも知れないものを一度だけでも目にすれば  
間もなく後込みして跪くようになるだろう。

我が露、我が露！ 我が若き日の愛、<sup>(2)</sup>

我が魂の輝く糧を 汝の不在が損なつてしまふ！  
長く舞い上つていないでおくれ、永遠の〈鳩〉よ！  
汝のいない人生は、色褪せて 台無しなのだ。

私の持つていたあるものは、<sup>(3)</sup>ずつと以前に  
吸って 啜り 味わうことを覚えたのに

今ではむかむかする 悲しい 鈍いものになつて  
苛々させ口論させ憔悴させ消耗させるものなのだ。

おお 汝の神聖な翼を抜けて振り落して下さい  
活き活きとした一滴を！ 生命が保っている一滴を！  
もし敬虔な悲嘆が〈天国の喜び〉を目覚めさせるなら

おお 彼の瓶を満たして下さい！ 汝の子供が泣いている！<sup>(4)</sup>

ゆつくりと悲し気に彼は成長し、  
やがて取り残されたみたいに縮んで病へと戻つてゆく、  
おお 養つて下さいあの生命を、彼を勢いづかせ<sup>(5)</sup>  
拡げて 汝の意志に叶うように開いてくれるものだから！

汝の永遠に潑瀾たる井戸を求めて  
汚れても萎れてもいないものが近づいてくる筈、  
瑞々しい不滅の緑がそこに棲み  
染み一つない白が 纏っているものの全てだ。

親愛なる密かな〈緑の姿〉<sup>(6)</sup>よ！ 下方で  
育まれた嵐と風と冬の夜な夜なは  
悩ませたりしないので 人は汝が成長するのを見、  
あの〈人〉がこれら全てを余り光らないものにしたのだ。

もしこのような明るい喜びを 彼が独りだけで  
汝に注ぎ、全てが一つの〈王冠〉<sup>(7)</sup>の中で出逢うなら  
〈太陽〉も 〈星々〉も自らの頭を隠してしまい<sup>(8)</sup>

〈月〉は毎度満ちても 沈むことだろう。

栄光を彼らの餌にしよう、彼らの心は  
余りにも高尚すぎて 下等な〈小部屋〉に相応しくない、  
尤も〈鷹〉は暴風雨と風の中で捕食できるし  
哀れな〈蜜蜂〉は自らの巣箱に棲むしかないが<sup>(9)</sup>。

栄光は、大方の考えどおり 今尚〈群衆〉の  
安っぽい金ぴかもので、退屈な日常事<sup>(10)</sup>で、  
彼らは余りにも善悪を取り違え、  
繁栄する悪徳<sup>(11)</sup>を美德だと判断する。

どうして穏やかな明るい〈良心〉が必要なのか？  
それ自体の内部に外からの吟味が？  
窓ガラスを壊してもっと光を得ようとする者は  
暴風雨へ向かつて行き安らぎに到ろうとするのだ。

だから汝の密かな成長を祝福して、騒音にしがみ  
ついたりせず、姿を見られず声を出さずに繁栄しよう、  
清潔を保ち、実を結び、生命を獲得して目を凝らそう、

白い翼を備えた（刈り入れ人たち）<sup>(12)</sup>が来てくれるまで！。

〔M・五一〇—一一〕

### 訳注

(1) 「また、イエスは言われた、神の国は次のようなものである、人が土に種子を蒔く」、次の第二七—二九節でこの譬話は完結する、「そして夜昼寝起きているうちに種子は芽を出し成長するが、その人にはどうしてそうなるか分らない。土は自ずから実を結ばせる。まず莖、次に穂、そしてその穂には豊かな実が出来る。実が熟すと彼は早速鎌を入れる、収穫の時が来たからである」。

(2) *my early love*. 「後退」〔小考 (一) 18〕の八行目「最初の愛」*“my first love”*と比較のこと。その訳注(2)も。「ヨハネの黙示録」2・4「それでも私にはあなたに物申すことがある、あなたは最初の愛から離れてしまったから」〔M・七四九〕。

「愛」とは「愛の対象」、即ち〈神〉。

(3) *Something I had*. 詩人の精神生活を指すに相違ない〔RA・六二〇〕。

(4) *O fill his bottle I thy childe weeps I* 「瓶を満たす」という表現はもう一か所「森」〔小考 (二) 49〕の四八行目に「*To fill my bottle*」と使われる。「懇願」〔小考 (六) 28〕

の一二行目「あの嘆き悲しむ〈若者〉及びその訳注(3)を参照。「摂理」*“Providence”*〔M・五〇五—一六〕の二六行目共々「創世記」21・9—21の、イシユマエルが渴死から救われる話参照〔M・七四八〕。

(5) *blow*. 「繁茂する」〔花咲く〕「完成に達する」(OED *blow* v2) 〔RA・六二〇〕。

(6) *Greeness*. 「記六」〔本稿前出〕の一九—二一行目参照〔M・七四九〕。

(7) *one Crown*. 〓*the crown of life*. 「ヤコブの手紙」1・12「試練に耐える者は…神を愛する人々に主が約束された生命の冠を受け取る」〔RA・六二一〕。

(8) *Both Sun and Stars…get them down*. 世の終りが来るだろう、の意。例えば「ヨハネの黙示録」の9・2「太陽も空も穴の煙のために暗くなった」。ヴォーンは、精神生活を送る自分に、永遠の生命の不朽の冠を暗示するものとして、独りだけで注がれる「明るい喜び」を見ているのだ〔RA・同〕。

(9) *The poor Bee…dwell*. ウェルギリウスの『農事詩』(*Virgil, Georgic*) は一六二八年にトマス・メイ (*Thomas May*) の英訳が出ているが、養蜂を扱う第四巻には、「雲が空を被う時には彼らは遠くへさすらい出ない、…澄んだ晴れた天候の時には飛び出してゆく」とある〔RA・六二一〕。

(10) *Glory…is a drudge*. 「栄光は、大衆が最も心惹かれるも

のに与える安っぽい褒美だが、実際は、(大衆の気紛れの) 召使いだ」(Christopher Dixon, *A Selection from Henry Vaughan*, Longman, 1967, p.151). [RA・回]

- (11) thriving vice. 「兵士」『The Men of War』[M・五一七]の二六行目「上首尾の邪悪」『Successful wickedness』と「驢馬」[小考(八) 44]の二六行目「繁栄する悪」『thriving vice』を参照[M・七五〇]。尚、『thriving』は『この詩集では』の二回しか使われない。因に、『successful』は『今挙げた一回だけ。これだけでみるなら、』の詩集では、『巧く』「繁栄する」は、『(邪)悪や悪徳の形容詞である。』

- (12) the white winged Reapers. 「墮落」[小考(二) 55]の最終行「汝の鎌を投げ入れよ」と『ヨハネの黙示録』14・14-18(御使いが鎌を持ち別の御使に実った穀物と葡萄を刈り取らせた)を参照[M・七五〇]。  
「マタイによる福音書」13・39「刈り入れ人たちは天使である」を参照[F・三〇九]。

ABABと押韻する(第一連には‘once’と‘thrones’との、第九連には‘minds’と‘winds’との擬似韻があるが)四行詩一二連から成る八音節詩行(唯一、一五行目‘If pious griefs Heavens joys awake’は九音節だが、‘pious’を単音節語として使用したものか)四八行の詩。

「記八」の直前で、「虹」[小考(二) 52-54]の直後に配置されている。虹に触発され、死者を広く追悼する「記八」を誘発する作品でもある。

\* 参考文献 本稿で直接言及したものについては文中では各文献の上に記した略記号で示す。数字はそのページ表示。

[A] Austin, Frances. *The Language of the Metaphysical Poets*. London : The Macmillan Press, 1992.

[B] Beer, Patricia. *An Introduction to the Metaphysical Poets*. London : The Macmillan Press, 1972.

[B] Blunden, Edmund. *On the Poems of Henry Vaughan : Characteristics and Intimations*. London : Cobden Sanderson, 1927 ; rpt. New York, 1969.

[B] Blunden, Edmund. *Lectures in English Literature*. Tokyo : Kodokan, 1952, 2nd ed.

[B] Blunden, Edmund. *Nature in English Literature*. London : The Hogarth Press, 1949. 1st ed. 1929.

[B] Bloom, Harold, ed. *John Donne and the Seventeenth-Century Metaphysical Poets*. New York, New Haven, Philadelphia : Chelsea House Publishers, 1986.

- [**㊦・㊧**] Bradbury, Malcolm and David Palmer, eds. *Metaphysical Poetry* (Stratford-upon-Avon Studies 11) London: Edward Arnold, 1970.
- [**㊨㊩**] Bethell, S. L. *The Cultural Revolution of the Seventeenth Century*. London: Dennis Dobson, 1951.
- [**㊪**] Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan, Siliurist*. Introduction by H. C. Beeching. 2vols. London and New York: Charles Scribner's & Sons, 1896.
- [**㊫**] Durr, R. A. *On the Mystical Poetry of Henry Vaughan*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1962.
- [**㊬**] Empson, William. *Seven Types of Ambiguity*. London: Chatto and Windus, 1930; Penguin Books, 1961. 174-75.
- [**㊭**] 岩崎宗治訳『曖昧の七つの型』(研究社 一九七四) 三二―三三―三五]°
- [**㊮**] Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry Vaughan*. New York: Doubleday. 1964; New York University Press, 1965.
- [**㊯**] Friedenreich, Kenneth. *Henry Vaughan*. Boston: Twayne Publishers, 1978.
- [**㊰**] Gardner, Helen, ed. *The Metaphysical Poets*. London: Oxford University Press, 1961.
- [**㊱**] *Seventeenth Century Studies presented to Sir Herbert Grierson*. London: Oxford University Press, 1938; rpt. New York: Octagon Books, INC., 1967.
- [**㊲**] Garner, Ross. *Henry Vaughan: Experience and the Tradition*. Chicago: University of Chicago Press, 1959.
- [**㊳**] Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan: A Life and Interpretation*. Oxford: Clarendon Press, 1947.
- [**㊴**] Holmes, Elizabeth. *Aspects of Elizabethan Imagery*. Oxford: Basil Blackwell, 1929.
- [**㊵**―] Holmes, Elizabeth. *Henry Vaughan and the Hermetic Philosophy*. Oxford; 1932; rpt. New York: Haskell House, 1966.
- [**㊶**] Hammond, Gerald, ed. *The Metaphysical Poets: A Casebook*. London and Basingstoke: The Macmillan Press, 1974.
- [**㊷**・**㊸**] Healy, Thomas and Jonathan Sawday, eds. *Literature and the English Civil War*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.

- [1] Leishman, J.B. *The Metaphysical Poets: Donne, Herbert, Vaughan, Traherne*. Oxford: Clarendon Press, 1934.
- [2] Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston: Little, Brown and Company, 1865.
- [3] Martin, L. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Oxford: Clarendon Press, 2nd ed. 1957.
- [4] Martin, L. C., ed. *Henry Vaughan: Poetry and Selected Prose*. London: Oxford University Press, 1963.
- [5] Miner, Earl. *The Metaphysical Mode from Donne to Cowley*. Princeton: Princeton University Press, 1969.
- [6] Martz, Louis L. *The Paradise Within: Studies in Vaughan, Traherne, and Milton*. New Haven and London: Yale University Press, 1964.
- [7] Martz, Louis L. *The Poem of Mind: Essays on Poetry/English and American*. New York: Oxford University Press, 1966.
- [8] Martz, Louis L. *The Poetry of Meditation: A Study in English Religious Literature of the Seventeenth Century*. New Haven and London: Yale University Press, 1962.
- 1st ed. 1954.
- [9] Petter, E. C. *Of Paradise and Light: A Study of Vaughan's "Silex Scintillans"*. Cambridge: Cambridge University Press, 1960.
- [10] Richmond, H. M. *Renaissance Landscapes: English Lyrics in a European Tradition*. The Hague: Mouton, 1973.
- [11] Rudrum, Alan, ed. *Henry Vaughan: The Complete Poems*. New Haven and London: Yale University Press, 1976.
- [12] Simmonds, James D. *Masques of God: Form and Theme in the Poetry of Henry Vaughan*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1972.
- [13] Strong, James. *The Exhaustive Concordance of The Bible: Showing Every Word of the Common English Version of the Canonical Books, and Every Occurrence of Each Word in Regular Order; Together with a Comparative Concordance of the Authorized and Revised Versions, including the American Variations*. New York and Cincinnati: The Methodist Book Concern, 1894; rpt. 1926.

- [9E] Schuchard, Ronald, ed. *The Varieties of Metaphysical Poetry By T. S. Eliot/The Clark Lectures at Trinity College, Cambridge, 1926 and/The Turnbull Lectures at The Hopkins University, 1933*. London : Faber and Faber, 1993. [ロナルド・シュハート編注「T・S・エリクソン・リー・講演」村田俊一訳(松伯社 二〇〇一)】。
- [9・>] Spencer, Theodore, and Mark Van Doren. *Studies in Metaphysical Poetry : Two Essays and A Bibliography*. Port Washington, N. Y. : Kennikat Press, 1939.
- [H] Tuve, Rosemond. *Elizabethan and Metaphysical Imagery*. The University of Chicago Press : 1947 ; rpt. Phoenix Books, 1961.
- [H-] Tuttle, Imilda. *Concordance to Vaughan's SILEX SCINTILLANS*. University Park and London : The Pennsylvania State University Press, 1969.
- [M] Whittier, John Greenleaf. *Anti-Slavery Poems : Songs of Labor and Reform*. London : Macmillan and Co., 1889.
- [MG] Williamson, George. *The Donne Tradition : A Study in English Poetry from Donne to the Death of Cowley*. New York : The Noonday Press Inc., 1958. 1st ed. 1930.
- [W 1] Williamson, George. *A Reader's Guide to the Metaphysical Poets*. London : Thames and Hudson. 1968.
- [WH] White, Helen C. *The Metaphysical Poets : A Study in Religious Experience*. New York, 1936 ; rpt. New York : Collier Books, 1966.
- [W-] Wilcox, Helen, ed. *The English Poems of George Herbert*. Cambridge : Cambridge University Press, 2007.
- [P 0 >] Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*. Amsterdam · London : North-Holland Publishing Co., 1974.
- [荒川] 荒川光男「黙想詩「夜」を読む」(『十七世紀英文学のポリティックス』十七世紀英文学会編、金星堂、一九九〇。一八一—一九七)
- [川崎1]「ヘンリー・ヴォーンの自然神秘主義」(川崎寿彦「薔薇をして語らしめよ―空間表象の文学」名古屋大学出版会、一九九一。一七四—一九八)
- [川崎2] 川崎寿彦『鏡のマネリスム―ルネッサンス思想力の側面』研究社、一九七八。一五二—一五八。
- [松崎] 松崎毅「ルーパート王子と「鷺」——ヘンリー・ヴォーンの世俗詩と検閲をめぐる論考——」(『十七世紀



と英国文化」十七世紀英文学会編、金星堂、一九九五。  
一七二—一九二

本誌連載のこれまでの拙稿は左記のように略記、算用数字はそのページを表示。

〔小考（二）〕「アスク川の白鳥——ヘンリー・ヴォーン小考」『成城文藝』第一九九号、1—24、二〇〇七年六月。  
〔小考（二）〕「その瞑想を追い始める——ヘンリー・ヴォーン小考（二）」『同』第二〇〇号、47—67、二〇〇七年九月。

〔小考（三）〕「〈死〉からの再出発——ヘンリー・ヴォーン小考（三）」『同』第二〇一号、13—33、二〇〇七年十二月。  
月。

〔小考（四）〕「序文」と「反歌」に包まれて——ヘンリー・ヴォーン小考（四）」『同』第二〇二号、1—32、二〇〇八年三月。

〔小考（五）〕「複眼による並置比較思考——ヘンリー・ヴォーン小考（五）」『同』第二〇三号、1—27、二〇〇八年六月。

〔小考（六）〕「追求は異なる角度、視点から——ヘン

リー・ヴォーン小考（六）」『同』第二〇四号、15—42、二〇〇八年九月。

〔小考（七）〕「花と星へ 嵐と夜から苦悶に耐えて——ヘンリー・ヴォーン小考（七）」『同』第二〇五号、13—43、二〇〇八年十二月。

〔小考（八）〕「〈隠された宝〉へ向かって——ヘンリー・ヴォーン小考（八）」『同』第二〇六号、17—66、二〇〇九年三月。

拙訳での〈〉付きとゴチック体は、原詩ではそれぞれ大文字で始められる語句とイタリック体部分である。

\*本稿は二〇〇八年度成城大学文芸学部特別研究助成による成果の一部である。